

## 8月15日の思い

長崎の大学での調査では、「終戦の日」がいつかを正しく答えられた学生は 33.2%だったそうです。戦後生まれが人口の4分の3を超えました。それにしても8月15日は、果して戦争の終わった日だったのでしょうか？

天皇が初めてご自分の声で全国民に表明した玉音放送では、無条件降伏を迫る米・英・中国のポツダム宣言を受諾するというものでした。つまり降伏したのです。ですから8月15日は日本の歴史始まって以来の戦争に負けた日でした。

私は13歳の少年でした。「アジア諸国が欧米の植民地支配から解放され、天皇を中心に共に栄えていくために戦争をしているのだ。正義の戦いだから、日本は絶対に勝つ。強い兵隊になれ。天皇陛下万歳と叫んで立派に戦死し、靖国神社に神として祀られよ！」と徹底的に軍国教育を叩き込まれました。

大東亜戦争(太平洋戦争)開始の天皇詔勅がでた1941年12月8日以降は、毎月8日に池袋から九段の靖国神社に歩いて参拝し、「私の命を天皇陛下に捧げて、この神社に祀られます」と誓いを繰り返したのです。

鎌倉時代の昔に、中国大陸を支配した蒙古(元)の大軍が北九州に二度攻めて来て二度とも退却し、日本の国土が侵略されずにすんだ歴史があります。二度とも台風の襲来で船団が沈没、大損害を受けたからでした。大東亜戦争の戦況が不利になりますと、あの神風が再び吹いて最後には必ず勝つ。神の国日本は不滅だということが言われ出しました。

敵の軍艦に大型爆弾を抱えた飛行機で突っ込み、体当たりする自爆飛行隊を神風特攻隊と呼びました。神風を呼び込む作戦だったのです。しかし敵艦の対空砲火に阻まれて、多くは体当たりする前に、撃墜されてしまいました。若い命が大勢無駄死しました。

敗戦の年は国内だけでも、3月10日夜大空襲で東京の下町は焼け野原になり、10万人が死にました。6月の沖縄地上戦では巻き込まれた市民を含めて25万人が死にました。そして40万人の広島市が一発の原爆で廃墟になり、二発目が長崎に落ちました。

それでもまだ勝てると主張して降伏の受諾を強く反対した陸軍大臣が、8月15日に割腹自害しました。宮城を護る近衛師団では兵隊たちが降伏を承知せず、師団長を切り殺しています。国を護るべき軍部が狂気に陥って開戦し、15年戦争の果てに、国を破壊してしまったのです。軍隊とは、恐ろしいものですね。

インド攻略を目指したインパール作戦では72000人の兵士が飢えと病気で死にました。しかしその敗走中に、ビルマの貧しい農民たちから優しく助けられた兵士たちが大勢います。武器も持たぬ敗残兵に、老女から「わずかでご免なさい」とぼろ布に包まれた三合の米を渡された驚き。病んでいる身を治るまでかくまってくれた農家。

命拾いして帰還できた稲田さんもその一人でした。彼は死んだ戦友の分まで懸命に働いて事業を成功させ、毎年ビルマを訪れて遺骨収拾に当たりました。親切を受けた村々を訪ねて感謝の寄付を続け、遺産の1/3をビルマの村の寺院に取り分けました。アジアの盟主と威張っていた自分たちは戦争に負けて当然だった言っています。

私が教会で出会ったアメリカ人宣教師のマーチンさんは、大学生で戦争に招集されました。B29の機関砲射手として、東京の爆撃に参加し戦闘機の襲撃を受けました。夢中で機関砲を撃ちまくり、体当たりされる直前に相手が火を噴いて落下。日の丸の鉢巻をした操縦士の顔が目に残りました。帰途の機上で彼は祈りました。「神さま、もし私が生き残りましたら、日本の国のためになる働きをあの青年の代りに私がいたします」生き残った彼は、大学を終えると神学校に進み、宣教師となって東京に戻って来たのです。

私たちは敵を鬼畜米英と呼び、憎んで殺す相手と教えられました。やはりこのような心の私たちは戦争に負けるべきでした。負けて出直さなければならなかったのです。私たちは戦争をして負けた深い意味を、いつまでも心に刻んでおきたいものです。

“彼らは剣を打ち直して鋤とし 槍を打ち直して鎌とする  
国は国に向って剣を上げず もはや戦うことを学ばない“ 聖書